蹴鞠についての造園的考察

飛 田 範 夫*

A Study of the Japanese Sport “KEMARI” from Landscape Architecture

Norio HIDA

摘要：日本の伝統的スポーツの1種である蹴鞠は、中国から7世紀頃に日本に伝来したものと考えられる。当初邸内の庭で鞠を蹴り合うだけであったが、次第に本格化して「鞠の庭」が定められ、4隅に懸と呼ばれる桜柳楓松などの樹木を植えるに至っている。造園的に見ると、懸の仕立には庭園の剪定技法が応用され、鞠の庭の舗装に関しては、土と砂あるいは塩を含ませたものをつき固めるなどの工夫がなされていることがわかる。

1. はじめに

蹴鞠（音読は「しゅうきく」、訓読は「けまり」）は日本古来のスポーツであるが、主として公家社会に伝えられて来たために、今日では非常に特殊なものになっている。一見造園とは無関係のようだが、蹴鞠を行う場所（これを「鞠の庭」と言う）には四方に樹木を植えること（これを「懸」と呼ぶ）や、鞠の庭の舗装に関しても、かなり造園的な工夫がなされている。こうしたことから、改めて蹴鞠について考察してみたい。

蹴鞠については昔から「有職故実」の立場から調べられていて、その成果も大きい¹⁾。また、遊びの研究という観点からも論究されているし²⁾、今日的にはスポーツ史の側からの研究がされている³⁾。本研究では以上の研究成果を参考にしつつ、古文書の考察を行うことにした。

蹴鞠についての主要な古文書は、^{はなわほきのいち}塙保己一（1746-1821）が編集した『群書類従（第19輯）』と、彼が着手してその後完成した『続群書類従（第19輯・中）』にかなり収録されている。これらの文献の書かれた年代は、『群書解題』⁴⁾によってある程度まで知ることができる。これまでの蹴鞠の解説書は、規則などについての歴史的考察に不明瞭な点が多いので、本研究ではできるだけ歴史の変遷をたどることにした。『群書類従』及び『続群書類従』所収の文献を使用するについては、繁雑さを避けるためにそれらの略称、著者、年代等を先に以下に記しておくことにする。年代順に並べるように努めたが、著作年代の不明なものが多いために前後するものもあり得る。

『蹴鞠簡要抄』（以下『簡要抄』と略す）著者不明。

年代不詳。平安時代から鎌倉時代にかけてのものか。

『成通郷口伝日記』（以下『成通郷口伝』）藤原成通（1097-1159?）著とされるが偽書か。年代不詳。

『内外三時抄』飛鳥井雅有（1241-1301）著。

『遊庭秘抄』二条為定（1285-1360）著。

『松下十巻抄』賀茂流の伝書。飛鳥井雅綱（1489-1563）が注を加えている。

『蹴鞠百首和歌』（以下『百首和歌』）飛鳥井雅康（1436-1509）の判があるが偽書か。天正15年（1591）の奥書がある。

『蹴鞠之目録九拾九箇条』（以下『九拾九箇条』）松下教久著。賀茂流の伝書。寛永8年（1631）。

『蹴鞠百五十箇条』（以下『百五十箇条』）著者及び流派不明。年代不詳。寛永6年（1666）の奥書がある。

2. 蹴鞠の歴史

蹴鞠が中国から伝来したものであることは古くから知られていて、『松下十巻抄』にも中国古代の黄帝の時代に始まり、日本で最初に蹴鞠を行ったのは天智天皇であると述べられている。しかし、蹴鞠の起源については同書は宗教的なものであるとしていて適確ではない。狩谷掖斎が『箋注倭名類聚抄』（1827）で既に引用しているように²⁾、蹴鞠のことは『史記』や『漢書』の軍事関係の記事の中に出ている。つまり当初は兵士の身体訓練のための競技として、鞠を蹴るということが行われていたようである。

日本にいつ伝わったのかが問題となるのだが、『日本

*修成建設専門学校緑の学科

書紀』の皇極3年(644)正月1日の条に、中臣鎌子(後の藤原鎌足)が蘇我入鹿を倒そうとして、中大兄皇子(後の天智天皇)に近付きになったのは、法興寺での「打毬」(傍訓は、「くえまり」)の時であったという記事がある。文字通りに解釈すると球を打つ競技と考えられるので、蹴鞠とは異なるものであるとする説も強い。しかし、大宝3年(703)5月5日には、内裏で蹴鞠会が行われたと『本朝月令』にある。その後記事は絶えているが、『西宮記』には延喜5年(905)3月20日に蹴鞠が催され、蹴り上げ続けた回数は206度であったと記されている。この記録からすると、文献上には現われていないものの、実際には貴族の間でかなり行われていたと考えられるので³⁾、天智天皇の時代頃には伝来していたと見てよいであろう。

その後のことは『享徳二年(1453)晴之御鞠記』⁵⁾によれば、鞠神と呼ばれた藤原成通が藤原頼輔(1112-1186)に奥義を伝え、頼輔の孫の宗長(1164-1225)と雅経(1170-1221)が難波と飛鳥井の両派の祖になっている。成通の子の泰通や宗長、雅経は後鳥羽天皇(1180-1239)に鞠道の「長者(最高者)」の称号を承元2年(1208)に贈っているが、この後鳥羽天皇の時に蹴鞠の様々な規則がつくられたという。後鳥羽天皇は『新古今和歌集』を勅選するなど多種多芸で、蹴鞠、管弦、囲碁などすべてのことに通じた人物であった。この多芸さは、朝廷文化を復興しようとする意志に基づくと思われるべきであろう。そうした流れの中で蹴鞠に関しては『簡要抄』が書かれ、『成通郷口伝』のような偽書がつくられたのではないだろうか。承久の乱(1221年)後は、朝廷側の情勢も落着きを取り戻し、後嵯峨天皇(1220-1272)や後深草天皇(1243-1304)、龜山天皇(1249-1305)は蹴鞠を再び盛んにしている。鎌倉幕府内においても蹴鞠は流行したらしく、『吾妻鏡』にも記事が掲載されている²⁾。

室町時代のことについて先の『享徳二年晴之御鞠記』は、足利義満(1358-1408)が禁裏や仙洞御所においてしばしば蹴鞠を行っていることや、足利義政(1436-1490)が「いまだはたちにもたり給はぬに、ためしなき御上足(名人)と世にののしりもてなしたてまつる」と述べている。一方、『松下十卷抄』から、賀茂成平(?-1105)を祖とする上賀茂社司松下氏の賀茂流も、この時代にはかなり流儀を体系化していることがわかる。「祈禱神前などの鞠」という項目などがあり、神社に伝わる流派であることを感じさせるが、「陣中のまりの事」などの項は戦乱の時代の雰囲気をよく伝えている。

室町時代末になると蹴鞠が行われることも少なくなり、辛うじて命脈を保って江戸時代に至る。この時代には徳川家に認められた飛鳥井家の勢力が強くなり、入門免許状や蹴鞠の会を催すことの許可の権限などを独占するようになって、極めて閉鎖的になる。民間では曲鞠などと

称する曲芸的な蹴鞠が流行するが、正当とは認められていない¹⁾²⁾。

明治時代になってからは、36年(1903)に京都に蹴鞠保存会が創立され、蹴鞠を維持保存していくことになり⁶⁾、現在京都では正月4日に下鴨神社で、4月14日に白峯神宮、大津市では平野神社で8月9日に蹴鞠奉納が行われている⁷⁾。

3. 蹴鞠の規則

蹴鞠がどのような規則で行われていたかだが、全体的に言えることは、時代が下ると共に細かく規定されるようになったということである。

蹴鞠をするのに適した時期は、『簡要抄』によれば、暖かくなった3月上旬が良いとする説や、春の初めならば薄曇り風のない日で、夏ならば少し風のある晴れた日が吉日だとする説などがある。

場所については、貴人が見物できる建物に近い所が良かったようである。『承元御鞠記』⁸⁾(承元2年[1208]の記録)には、大炊御門頼実邸の南庭に見物席として4棟の仮屋を建てるなどしたとある。250年程後の『享徳二年晴之御鞠記』によれば、「御まりのつばはにしのへい中門のうち、ぎちやう(議定)所のまへなり」となっている。時代によって建物の配置や形態は異なるが、建物前面の植栽や園池などの存在しない平地の部分が、鞠の庭として選ばれたと言える。

蹴鞠を始めるに当っては、鞠の庭の中に鞠を置く「露払の鞠」(『貞治二年[1316]御鞠記』⁹⁾の語)などがなされた後に、鞠足(蹴鞠をする人)が庭に入り、4本の懸の木の元に2人づつ立つ。人数については、『簡要抄』は8人あるいは7人としているが、後世も同様であったようである。最初は儀式的な「上鞠」が行われ、その後競技が始まる。

競技方法は幾つかあったようだが、一般的なものは「貫鞠」と呼ばれるもので、地上に落とさずに何回蹴り続けられるかにあった。そのため全員が気持を合わせる事が重要となり、組み方は「未練(未熟)の人のそば、或は老者などのかたはらには、はやきあし、さほうの人(上手な人)を立てきなり」(『百五十箇条』)という仕方であった。

鞠を蹴ることは難しいことらしく、『九拾九箇条』が、

鞠をみる事。あをのかずうつむかず。ゆるまずおどろかず。かほにて見べからず。目にてみるべし。

と説明しているように、ただ蹴るのではなく蹴る姿を優美に見せることも大切なことであったようである。また、相手が受けやすいように鞠を渡すことも重要であって、『九拾九箇条』は「うつくしくにじ(虹)のたちたるやうにけ渡す也」と述べている。3回続けて1人が蹴ることも許されているが、これは「鞠しづかならずあれたる

ときは、うけとりて三足もつべし」(『成通郷口伝』)というように、相手が受け取りやすいように渡す方法であった。

8人で蹴るとなると、次に誰が蹴るかが問題となるが、蹴ろうとする人が掛声を出すのが原則であったようである。『遊庭秘鈔』は「やくわ、ありくわ、あり、を」などの掛声を紹介しているだけだが、時代の下る『九拾九箇条』では煩雑な決まりが出来ていて、「や」は「うかがひ声」、「あり」は「請声」、「応」は「渡す声」であると分類している。

鞠を手で扱うことは厳しく禁じられていて、鞠の庭から出たものも蹴り返すように定められている。懸の木に引っ掛けてしまった場合には、竹棹(寸法が定められている)で掻き落すべきだとされていて、木の枝を揺って落とすことは禁止されている。

このような規則でもって蹴り続けるわけだが、回数を数える仕方もまた決まっている。しかし、声に出して数え始める時がいつからかは厳密には定まっていなかったようで、『九拾九箇条』は「廿より初め又五十より初候事も存之」としている。途中で人が代わることも多く、『貞治二年御鞠記』を見ると、最初は身分の高い人が行い、次第に入れ代って最後には賀茂社の人々が交るというようになっている。しかし、一応回数には制限があって、『遊庭秘鈔』によれば「三百又三百六十。又五百。至極は千也」という具合であった。

4. 懸について

(1) 懸の起源

「懸」の語源は、鞠を蹴り掛けるからではないかと考えられるのだが、「かぶさるように広がった枝ぶり」を意味するという説もある¹⁰⁾。

懸を設けるようになった時期については、『松下十巻抄』は「木を植る事日本にて始候事。大唐にてはなきよし申伝也」と述べ、『九拾九箇条』は「後鳥羽院の御宇(時代)」であるとしている。

懸を植えるようになった理由については、『簡要抄』の記載が参考になる。

柳かかりの事。八条冠者光親云。鞠をつよくかくべし。柳はやはらかにて、鞠をとをくはぬなりと云々。(中略)鶏冠木かかりの事。庭訓抄伝。えだこはくしてまりにしなわず。強くあたればことにとをくはぬ。又まりとかく枝につたひてとをりにくし。この心をえてはからひあぐべしと云々。

懸に鞠を蹴り掛ける時の注意なのだが、桜や松についても同様に伝書や口伝を載せている。なぜこれ程まで懸に拘泥するのだが、懸を植えるようになったのは、懸に鞠を蹴り上げて落ちてくるのを受けるのが面白かったからではないかと推測される。蹴り続ける回数を競うことよ

りも、懸の方に興味があったことを示す文章が、同書の鞠の大きさを述べた項にある。

春のはじめにはおほきなるべし。木のえだもこはく、まりもあしにつかず。み(身)もなれぬおりはおほきなるがよき也。二月のすゑつかた、三月よりちいさくなりて、葉がかりにはちる(小)さくなりはつべし。もし、鞠を蹴り上げる回数を増加させようとするならば、蹴りやすい一定の大きさにしたはずである。

(2) 樹種

樹種を調べてみると、懸の起源とも関連するような次の文章が『遊庭秘鈔』にある。

もと木とて庭に懸の座敷にあたりて、いかならん木にても本より立たる木侍らば、何木にてもきらふべからずと式(成通の『三十ヶ条式』)にもかかり。これに続いて、土御門殿にあった名高い梨の木つちみかどの懸も本来庭にあったものだということが書かれている。懸として元々庭に植えてあった樹木を利用するようになったのは、鞠が偶然木に当たってその落ちる様子が面白かったからではないだろうか。これが懸の起源であったと思われる。

後鳥羽天皇の時代に定められたことは、懸は4本とすること、その樹種は桜、柳、楓、松とするのが好ましいという程度のことであろう。そう推定する理由は、やや時代の下る『内外三時抄』に「同木四本又同木三本常事なり」とあるからである。また、先の4種を式木と呼ぶが、式木を植える方向が定まったのは後の時代のようなからである。式木の方角について『簡要抄』は次のように述べている。

成平が申云。さくらをむねとする事なれば御所のかたにうふべし。松の木はひがくしのために西の方にうふべし。

内裏の紫宸殿の左近の桜に因んで、桜を御所の方向に植えるべきだとするのであろう。西日を防ぐために常緑の松を西側に植えようとするのは实际的である。次の時代の『松下十巻抄』も式木の樹種は同じだが、方向については書いてない。『内外三時抄』では「当流には良(北東)桜、鶯(南東)柳、坤(南西)蛙手、乾(北西)松なり」と飛鳥井流の規定を示している。同様の事柄が後の『貞治二年御鞠記』や『遊庭秘鈔』、『九拾九箇条』にも述べられている。このようなことから、式木の方角については13世紀頃に飛鳥井家が定めたことが、次第に一般化したものと考えられる。

懸の樹種が厳密に規定されていなかったことは、様々な雑木を混ぜていることから知られる。

雑木は榎棕梨槻、これはみな有²先例¹⁾。(中略)式木雑木植まざる事また常事なり。

と『内外三時抄』は述べている。これに『遊庭秘鈔』と『松下十巻抄』、『九拾九箇条』、『百五十箇条』に書かれ

ている雑木をすべて挙げると、「榎、棕、梨、槻、椿、柿、梅」の7種類になる。梅については「鞠付事なし」(『遊庭秘鈔』)とする説もあることからすると、高木になる落葉樹が特に好まれていたことがわかる。

(3) 切立

樹木がない所で蹴鞠を行う場合には、根を付けずに幹だけを切って立てるという「切立」が用いられている。この樹種については、『簡要抄』に「桜柳松鶏冠木也。但わたくしところには、えの木むくの木もする也」と記されている。また、『松下十巻抄』には「竹は切立の時ばかり也」とある。切立は「かれて後鞠をとをくはね」(『簡要抄』)などの性質があるために、あまり好まれなかったようである。『成通卿口伝』には、「切立はまたく鞠をおもはず。木の性なきが故也」と書かれている。

(4) 懸及び切立の本数、樹高、間隔

懸と切立の本数については、厳密な規定はなかったようである。楽しむことを主体とし、場所の広さに合わせていたためではないかと思われる。『遊庭秘鈔』には、

一本かかりもあり。庭せばき所に一本植_レ之。(中略)
元徳(後醍醐天皇の時代)の昔、仁寿殿の北向の御堂にも松の切立一本うへられ侍りし也。

と書かれている。場所に適合させるためか、懸の本数が「八本十六本などもあり」(『松下十巻抄』)という場合もあった。『九拾九箇条』には、1, 2, 3, 6, 8, 12本の懸の説明と図が掲載されている。

樹高については、『松下十巻抄』は「庭いかにひろくとも、一丈五尺(約4.5 m)には過まじく候」と言い、『九拾九箇条』は樹木の成長を認めて、「木の高さは一丈六尺ばかり。但不_レ定。木年々大になるもの也」としている。切立の高さも『遊庭秘鈔』によれば、ほぼ同様であった。

懸の間隔について、『内外三時抄』は次のように述べている。

木之間二丈貳三尺(6.6~6.9 m)、まめやか(の本格的な)大木などは四尺(7.2 m)にも可_レ植。また庭せばく木少くば二丈(6 m)にも可_レ植。二丈の内は未_レ見聞_一。

他の伝書もほぼこれと一致している。これらの数値は、樹木の間に2人の人間が動ける幅を勘案してのことであろう。なお、『遊庭秘鈔』には「軒と木のあはひ(間)、母屋の柱より一丈五尺(4.5 m)」とあるが、これは場所や建物の様式によって異なっただけと思われる。

(5) 懸のない庭

平安時代の年中行事を描いた『年中行事絵巻』(図1)には、懸がある一般的な形に近い蹴鞠の情景が見られる。ところが、『余景作り庭の図』(菱川師宣画、1680刊)の「蹴鞠の庭」(図2)と題するものは異様としか言えない。この本文には次のように説明されている。

このかかりは下やしきなどへおこしけまりなどあそばし、又は御きやくなど御ちそうのためになるしうきく(蹴鞠)のにわなり。四本かかりもなくしてさう(草)のにわなり。

江戸の大名の下屋敷にふさわしい蹴鞠の庭なのだが、懸がないので略式となっている「草の庭」だとする。鞠が外に飛び出すを防ぐために柵を設けたものだが、人間が檻の中に入れられているとしか見えない。懸の面白さが忘れられた例であると言えるだろう。

(6) 懸の仕立

懸の木は自然のままでは鞠が引_レ掛_レってしまうので、形を仕立てることが必要になる。『内外三時抄』は、今日の造園人と同じ眼で懸を見ていたことを示している。

木の面裏を見ることよくよく沙汰すべし。(中略)枝のいだきたるかた(多い方)を面とす。枝一切つればたと面かはりする事あり。(中略)縄にて寸法を取、ゆがみをも直べし。木すがたは大様犬の居たる様なるべし。

「犬の居たる様」とは図1に見られるような少し幹の曲った形状を言うのであろうか。

江戸時代には庭園の剪定技術がかなり進んでいたことが、懸の仕方からも窺える。『九拾九箇条』には、

桜は下枝鞠の留べき枝をすかし、梢はすかさず。花賞翫_一のため也。(中略)楓は本木にそひたる小枝切。(中略)余にさびしくはせず。秋の紅葉を賞翫する也。松は上中下よくすかし、(中略)六月に古葉を取すかすべし。

とある。花のことや紅葉を考えながら剪定していたことや、松の古葉を取るということが既に行われていたことがわかる。

ところで、樹木の外科手術的なことが鎌倉時代に既に行われたことを、『内外三時抄』は述べている。

数十年懸を植かへ植かへして見るに、古木の大柳を切かぶにして立れば、其切口より雨水入て中朽、虫食て不_レ幾損ず。切口に枝を打付て、そばよりも雨不_レ入やうにして、蟻灰の壁をぬりたるは、はるかに久しく不_レ朽なり。能々水入ぬやうにすべし。

柳は特に腐りやすいために、幹の切口に牡蠣の殻を砕いて石灰をつくり、漆喰のように塗っていたようである。

5. 鞠の庭

(1) 名称及び規模

蹴鞠を行う場所の呼び名は時代によって異なっていて、『簡要抄』は「鞠つば」、『内外三時抄』は「鞠場」、『松下十巻抄』は「鞠の庭をば当家には鞠庭と云。のの字をばいはぬなり」とし、『九拾九箇条』は「鞠の庭」としている。『家屋雑考』(沢田名垂著、1842序)を見ると、「鞠の庭、遊びの庭、鞠の壺、鞠の掛り、掛りの坪など、

蹴鞠の場所をいふなり」と述べている。『万葉集』の時代から屋敷内の平地を「庭」と呼んでいるが、平安時代頃から建物に囲まれた平地を「坪」と言っている。蹴鞠がそのような場所で行われることから、「鞠の庭」「鞠の壺」と呼ぶようになり、懸が設けられるようになってからは「掛りの坪」などと称するようになったのであろう。本論では最も一般的である「鞠の庭」という言葉を用いることにしたが、今日の辞書類には「鞠庭」と呼んでいるものが多い。

鞠の庭の規模はどの程度であったのだろうか。『内外三時抄』に「広狭は定分なし。屋により所にしたがふ」とあることからすると、当初は特に規定はなかったと推定される。しかし、同書には次のようにも書かれている。

惣じて鞠場の略（規模の小さなもの）は堅横五丈六尺（約16.8 m）なり。広は四方八丈九尺（約26.7 m）なり。木の間若二丈五尺（約7.5 m）、若二丈一尺（約6.3～6.6 m）ならば、其に随て増減すべし。

次第に規模は定まって行ったようで、後の『百首和歌』も「庭のうちは七間（約14 m）まなか四方なり かけりの内は二じやう三尺（約6.9 m）」とほぼ同型になっている。簡略化して言えば、鞠の庭は懸の間隔の2～3倍を1辺とする正方形ということになるであろう。

(2) 舗装

雨が降った後は鞠の庭がぬかるために、使用出来なくなり困ることがあったらしい。『徒然草』（吉田兼好著、1324-1331）にも、鋸の屑を雨の後に鞠の庭の泥土の上に敷いた人物を誉めたことに対して、乾いた砂を用意しておいて撤くのが本来の仕方であると批判している一節がある。確かに砂を使うのが一般的な方法であったらしいが、様々な工夫がされていたことが『内外三時抄』の次の記述からもわかる。

先高下なく平地たるべし。いたく堅はわろし。石なきを能とす。砂ふかき香入て悪し。もとの土をすこし取のけて、能土を砂にまぜて、よくよく突かたむべし。縄を引、水はかりにて高下なくすべし。さて雨の下時水のたまりたるを見て、くぼき所をうむべし。其上にあらからずこまかならず、よき程なる砂を一重まくべし。砂は川河海浜かはれり。

砂だけだと蹴鞠の杓が入り込むので、土と砂を混ぜて突き固めるべきだとしている。庭の水平は、「水準」を使って見ていたことが知られる。

(3) 排水

表面舗装からさらに進んで、排水方法を工夫した例もある。室町幕府の管領であった北畠家の鞠の庭について、『遊庭秘抄』は次のように語っている。

彼庭は深さ一丈（約3 m）に掘て底五尺（1.5 m）に塩をうつみ、上五尺に土をふるひて置之。日照侍れど灰（ほこり）たたず。しめりあがりてめでたし。

雨降は水とく（早く）引て殊勝なりし也。

5尺という厚さは信じられないのだが、塩と土の層をつくるのは、下の塩分が毛細管現象によって上がるなどして、土と混り合って固まり、土ぼこりが立たなくなるということであろうか。

また、同書は著者の体験談として、

一丈（約3 m）掘て底五尺に瓦を敷て、上五尺に土をふるひてをく。いかならん霖雨（なが雨）にも、晴間待ち侍れば、水とく引て最上也。

と述べている。これは今日の暗渠排水と同じ原理だが、溝に接続しておかなくても下の不透水層を掘り抜いておけば完全なものになる。

『九拾九箇条』には排水の他に、音響効果を図った技法が載せられている。

まづ懸をうへて後、三尺（約90 m）ほど掘て石を取るのけ、土に砂を合て塩俵をうつみ、四方には坪（壺）を埋み置也。但中につぼ壺つうづみてもよし。さて土をよくよくなして砂をまく也。

懸を舗装した後に植えると、舗装部分が壊れてしまうので、どの伝書も懸を先にすべきだとしている。土に砂を混ぜて塩俵と一緒に埋めるのは、塩俵の中の塩化マグネシウムなどがしみ出して、土と砂を固める作用をすることであろう。壺を埋めることは『百五十箇条』にも書かれていて、これには「沓をと（音）ひびきて興あらんためなり」と説明されている。これは能舞台の下にも実際行われている方法であって、効果は確かにあったようである。この壺に土を被せる方法については、『百五十箇条』は「こまかき砂にやま土を三ツがひとつほどまぜてつくべし」としている。細粒の砂と山土との比率は3:1ということになるが、これは昔から行われている版築と同様のものであろう。砂が多いのは排水のためであろうか。

(3) 打ち水及び箒目

鞠の庭に水を撤くことについては、『百五十箇条』に、

春夏は水うちてはき、又けしやう水を打なり。秋冬はけしやう水をうたず。

と書かれている。「化粧水」という表現が面白いが、これは現在も来客がある時などに庭に水を撤くことと同じ意味であろう。

鞠の庭の敷砂を掃くことについては、『松下十卷抄』では「足かたもなきやうに、うしろしざりにはくべし」と足跡を残さないようにと注意しているだけだが、後世の『九拾九箇条』になると、

ほうきめは軒を横に後へしりぞきながら、これ（足の誤写か）あとなきやうにはく也。掛の内は半にはくべし。何もさざ波のよするごとくにはくべき也。

今日の禅宗寺院に見られるような、庭の敷砂に波形の箒目をつけることは以前からされていたので、それを援用

図1 『年中行事絵巻』(12世紀〔原本〕)

図2 『余景作り庭の図』(1680年)

したのであろう。

6. おわりに

以上のことをまとめれば、蹴鞠に関して造園的に言えることは次のことであろう。

- 1) 庭の一部に蹴鞠の場がつくられたことから、庭の広狭によって鞠の庭の規模が定められ、懸の間隔も決定

されている。

- 2) 懸は当初は庭にあった樹木を利用していたが、13世紀頃から次第に本数や樹種が定まり、主要な樹木は桜、柳、楓、松の4種となり、植える方角も決められるに至っている。
- 3) 懸の仕立方には、庭木の剪定技術が応用され、鎌倉時代には樹木の切口の手当もされている。
- 4) 鞠の庭の舗装については、土と砂を混ぜてつき固める方法とか、塩を入れることによって固めるとかの技法が鎌倉時代頃からなされている。
- 5) 排水については、土と塩の層をつくるとか、瓦を埋め込んで暗渠化するという方法が、室町時代に既に行われている。

蹴鞠が行われるようになったことから、当時の造園的あるいは土木的技法が応用されたわけだが、そのために一層快適な遊戯となっており、さらに様々な工夫がなされるようになったと言えるであろう。

参考文献

- 1) 石村貞吉 (1987): 有職故実(下): 講談社, 318-326
- 2) 酒井欣 (1933): 日本遊戯史: 拓石堂出版社〔復刻〕, 96-147
- 3) 今村嘉雄 (1970): 日本体育史: 不昧堂出版, 48-51
- 4) 続群書類従完成会編・刊 (1960)
- 5) 一条兼良 (1453頃): 群書類従(第19輯) 所収
- 6) 猪熊兼繁 (1964): 日本歴史大辞典 (「けまり」の項): 河出書房新社
- 7) 京都市歴史資料館編・刊 (1988): 特別展図録 (京の競技)
- 8) 著者不明 (1208頃): 群書類従(第19輯) 所収
- 9) 二条良基 (1363頃): 群書類従(第19輯) 所収
- 10) 大野・佐竹・前田 (1974): 岩波古語辞典: 岩波書店

Summary: "Kemari", one of the old Japanese sports, was introduced to Japan from China at 7th century. In the beginning Kemari was played with a ball in the garden of the peerages's residence. But gradually the ground of Kemari was established and "Kakari" to which the ball was kicked were planted. The kakari's trees were cherry tree, willow, maple, pine tree and others. From the viewpoint of Landscape architecture, the trimming techniques of the garden were used for Kakari. And for the pavement of the ground, soil and sand were mixed and tightened sometimes with salt.